

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：47501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03352

研究課題名（和文）交代制ルールを中心とした子どもの仲間との関係調整の発達

研究課題名（英文）The Development of Children's regulation of the relationship with peers

研究代表者

藤田 文 (Fujita, Aya)

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：50300489

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：幼児の二人組の協力行動の分析から、仲間との関係調整には、交代制ルールの使用と視線や身振り等の非言語的コミュニケーションが重要であり、4歳から5歳にかけて発達し、男児より女児の方が発達が早いことが示された。また、小4、小6、中2の意識調査から、小4で既に交代制ルール意識を持っており、ルール遊び経験との関連も示された。大学生の協力行動の実験でも、関係調整において交代制ルール意識と幼少期の遊び経験の重要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来遊び場面で検討された仲間との関係調整における交代制ルールの発達が、本研究で協力行動でも幼児期で示された点で意義がある。また、非言語的コミュニケーションとの関連が新たに示された点、対象年齢を広げ発達過程と遊び経験との関連が示された点も学術的意義がある。青年期の友人関係不適応を予防するため、小学校低学年までの交代制ルールや遊びを体験できる保育・教育場面設定の重要性が示唆された点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：An analysis of the cooperative behavior of young children in pairs showed that nonverbal communication such as eye contact and gestures and the use of taking turns rules are important for regulating relationships with peers, and that they are developed between the ages of 4 and 5, with girls developing faster than boys. In addition, the survey of the attitudes of fourth-, sixth-, and eighth-graders showed that they already had an awareness of the taking turns rule system at the age of fourth grade, and that it was related to their experience of playing with rules. Experiments on cooperative behavior among university students also showed the importance of an awareness of the taking turn rule system and play experience in the regulation of the relationships with peers.

研究分野：教育心理学

キーワード：発達 仲間関係 交代制ルール

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、交代制ルールを中心とした子どもの仲間との関係調整の発達を明らかにすることである。そのために、従来関係調整の発達がみられた4歳児と5歳児を対象に、目標が明確な協力場面を設定して、子ども同士の関係調整を分析する。同世代の仲間との関係調整の能力は、子どもの社会性の発達にとって重要である。幼児期にこの発達がうまくいかないと、青年期の不適応のリスクになることが示されている(Rubinら,1998;Asendorpfら,2008)。2019年にはいじめの認知件数が過去最高となり、不登校や引きこもりなどの青年期の社会的不適応も増加している。従って、このような青年期の不適応の予防のためにも、幼児期からの仲間との関係調整の発達を明らかにして、社会性の発達の促進に示唆を与える研究が必要である。

藤本ら(2007)の社会的スキルのモデルにおいて、関係重視、関係維持、葛藤解決という関係調整の三要素が示された。筆者の研究(藤田,2007,2015)で、交代制ルールの産出は4歳児から5歳児にかけて規準が明確化し、他者配慮的ルールの主導ができるように発達することが明らかになった。特に5歳女児で他者を配慮した関係調整の発達が早いことも示された。また、規準が明確な交代制ルールが産出された場合にいざこざが少ないことも明らかになった。従って、交代制ルールの産出は、遊びに他者を取り込む関係重視の側面、他者と遊具を継続的に共有し遊びを展開する関係維持や葛藤解決の側面など関係調整の足場かけとなって重要な役割を果たすことが示された。

しかしこれらの研究は、ルールを共有すべき明確な目的がない遊び場面に限定されていた。遊び場面では、大きな不平等が生じなければ問題はなく、楽しく遊べればよいという状況である。より協力の目的が明確である場面において交代制ルールを中心とした関係調整がどのように発達するのかは明らかにされていない。従って本研究では、幼児の協力場面における自己と他者の関係調整の年齢差と性差を明らかにすることを目的とする。さらには、仲間との関係調整における交代制ルールの機能を明らかにするために、大学生の協力場面の行動や交代制ルールの意識についても並行して検討することを目的とする。大学生の方が、多様な協力場面の実験や多角的な意識の調査が実施できる。従って、子どもの発達の到達点を明らかにするとともに、交代制ルールの機能やその発達に影響を及ぼす要因を示すことが可能になると考えられる。

## 2. 研究の目的

### (1) 幼児の二者関係における協力場面での交代制ルールを中心とした関係調整

協力場面については、ビー玉落とし課題(Madsen,1971)を用いた研究が行われてきた。ビー玉落とし課題とは、枠の両側についたひもを、両側にいる子どもが引いて調節し、枠の中にあるビー玉を自分の前の穴に落とすものである。両者が同時にひもを引くと枠が外れて失敗となる。藤田(2019)では、4歳児と5歳児を同性・同年齢の二人組にして、どちら側の穴にビー玉を落としても成功として報酬が与えられる平等条件と、自分の穴にビー玉を落とした人のみ報酬が与えられる競争条件を設定して検討した。この研究では、4歳よりも5歳の方が、また男児よりも女児の方が、協力得点が高いという年齢差と性差が確認された。従って本研究では、さらに対象者を増やして同様の実験方法で、交代制ルールの産出と非言語的コミュニケーションを含む関係調整の発達を検討することを第一の目的とする。

しかし、新型コロナウイルス感染の蔓延によって、保育園・幼稚園の実験協力を得ることができず本研究期間に新たな実験の実施が困難であった。そのため、2019年に実施したデータを使って、特に非言語的コミュニケーションに着目した詳細なビデオ分析を行い、2年齢(4歳児・5歳児)×2性別(男児・女児)×2条件(平等・競争)で比較して、交代制ルールの産出と非言語的コミュニケーションの年齢差と性差を明らかにすることを目的とする。

### (2) 小学生から中学生を対象とした交代制ルール意識の発達と遊びの好みとの関連

保育園・幼稚園での対面での実験実施が困難な状況を踏まえ、質問調査が実施可能な小中学生に対象年齢を上げて、交代制ルールの意識の発達を検討することを第2の目的とする。交代制ルールの意識とは、仲間同士の遊びや話し合いの中で、役割行動や物の使用に関する平等な交代のためのルールを重視する程度のことである。幼児期に遊び場面や協力場面で観察された交代制ルールについて、小中学生でどの程度意識しているのかその発達を明らかにする。

また、令和3年度の大学生を対象とした研究で、交代制ルールの意識が子ども時代の遊びの好みと関連していることが示された。同様に、小中学生の交代制ルールの意識も遊びの好みとの関連がみられるのかを検討することも目的とする。

### (3) 大学生を対象とした関係調整における交代制ルールの機能と意識

子どもの研究と並行して、大学生の協力場面の関係調整や交代制ルールの機能と意識との関連についても検討することを第3の目的とする。大学生のビー玉落としゲームや紙コップ積み立て課題では、交代制ルールが明確に産出された。また、協同学習においては、交代制ルールの意識が有効に機能することが示された(藤田,2018,2019)。そこで本研究では、さらに大学生の二人組や三人組で多様な協力場面の実験を実施し、交代制ルールの機能や交代制ルールの意識

と関係調整の関連を明らかにする。さらに、交代制ルールを意識と子ども時代の遊びの好みとの関連を検討する。これにより、子どもの発達に必要な関係調整のあり方や交代制ルールの発達に及ぼす要因が明らかになると考えられる。

初対面の仲間との関係性の促進に発言の交代制が関連しているのかを、オンラインでも実施可能なゲーム場面を設定して検討する。発言の交代制が明示されていないワードウルフゲームと発言の交代制がゲーム構造に組み込まれているカタカナゲームで比較する。また、ゲーム場面では、情動的な共有である笑いが関係性を促進する可能性もあるため、笑いの影響についても検討する。

紙コップ積み立て課題での協力行動において、交代制意識が関連しているのかを検討する。大学生の交代制意識と子ども時代の遊びの嗜好性との関連を検討する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 幼児の二者関係における協力場面での交代制ルールを中心とした関係調整

4歳児22名と5歳児28名を対象に、同性同年齢の二人組でビー玉落としゲームを行ってもらった。ビー玉落としゲームは、以下の構造である。ゲーム盤の両側に子どもが位置して、子どもは紐を持つ。両方の子どもの側にビー玉を落とすための穴がある。中央の木の枠の中にビー玉が入っている。木の枠とひもがつながっている構造である。子どもの一人が紐を引っ張り一人は紐を緩めて、ビー玉を穴に落とすことができれば成功である。しかし、両側の子どもが同時に紐を引っ張ってしまうと、木の枠の中央部分の磁石が外れるようになっており、ビー玉が転がって左右の溝に落ちてしまう。この場合は、失敗となる。平等条件では、どちらの穴に入っても両方の子どもに報酬(シールのご褒美)が与えられる。競争条件では、自分の方の穴に入った子どものみ報酬が与えられる条件である。各ペアは平等条件と競争条件を10試行ずつ実施した。条件の順序は半数ペアごとにカウンターバランスされた。

この2019年の実験データを用いて、二人のやり取りの身振りや視線について、ビデオ分析を詳細に行った。

#### (2) 小学生から中学生を対象とした交代制ルール意識の発達と遊びの好みとの関連

小学4年生221名、小学6年生220名、中学2年生222名を対象にWEB上での質問調査を実施した。「トランプでカードを配る役割は交代でやった方がいいと思う。」「ごみすて当番は、やりたくない人が多いので、交代するルールを決めた方がいいと思う」など交代制ルール意識に関する8項目について、自分の考えにあてはまる程度を4段階で評定してもらった。また、ごっこ遊び、ルール遊び、一人遊び各4種類について、どの程度好きかを5段階で評定してもらった。

#### (3) 大学生を対象とした関係調整における交代制ルールの機能と意識

大学生を対象に多角的に関係調整を検討するために以下の3つの研究を実施した。

大学生42名を対象に、初対面の3人組でzoomオンライン上でゲームを行ってもらった。発言の交代制が不明確なワードウルフゲームと発言の交代制が明確なカタカナゲームを実施した。ゲーム終了後、親密度等関係性に関する質問調査を実施した。

大学生20名を対象に、二人組で紙コップ積み立て課題(Daseyら,2016)を用いた協力行動の実験を実施した。二人組で紐のついた輪ゴムを引っ張り、紙コップをはさんで移動させてできるだけ早く積み立てる課題だった。課題終了後、交代制意識に関する質問紙調査を実施した。

大学生196名を対象に、「誰かが考えを提案したら、次は自分が提案しようとする」など交代制ルール意識に関する4項目について自分の考えにあてはまる程度を5段階で評定してもらった。また、ごっこ遊び、ルール遊び、一人遊び各4種類について、子ども時代にどの程度好きだったかを5段階で評定してもらった。

### 4. 研究成果

#### (1) 幼児の二者関係における協力場面での交代制ルールを中心とした関係調整

協力場面での関係調整の発達を明らかにするために、交代制ルールの産出と非言語的コミュニケーションについてビデオ分析を行った。その結果、交代制ルールについては、表1に示すように、平等条件であれば、4歳児も5歳児も同程度に交代制ルールを産出して協力できていることが示された。また、交代制ルールの産出には性差がみられた。女兒の方が平等条件で交代制ルールを多く産出し、安定した仲間関係を調整していることが示された。男児の方が交代制ルールなしペアがみられ、ゲームの得点が入ったとしても、一方的にひもを引く不平等な関係調整が行われていることも示された。

非言語的コミュニケーションについては、相手への指示を示す指差しと得点時の喜びを示す身振り、相手への視線とアイコンタクトの数を算出し、年齢、性別、報酬条件で比較した。その結果、図1に示すように、身振りは5歳児の方が4歳児よりも有意に多かった。視線は女兒の方が男児よりも有意に多かった。また、図2に示すように、ゲーム開始時のアイコンタクトは、5

歳児の方が4歳児よりも多かった。さらに、アイコンタクトは、平等条件では女児の方が、競争条件では男児の方が多かった。

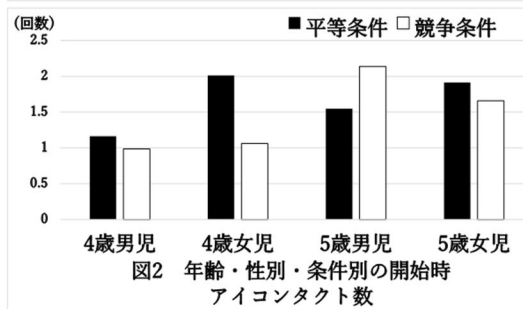
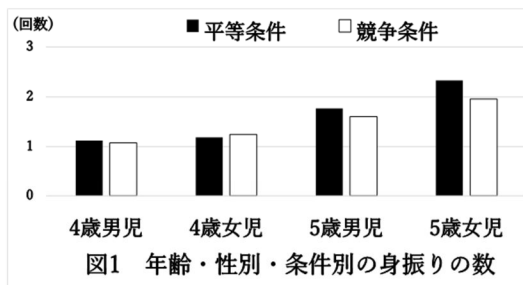
さらに交代制ルールと非言語コミュニケーションの関連を検討した。交代制ルールを使用しているペアは、一方的視線や身振りが多い傾向がみられた。一方競争条件では、交代制ルールを使用していないペアの方にゲーム開始時からアイコンタクトが多いという結果も得られた。

以上のことから、4歳から5歳にかけて、ゲーム開始時から視線やアイコンタクトで相手を意識し、非言語コミュニケーションを使って相手の行動をモニターしながら、交代制ルールを足場に関係調整していくという発達が示された。喜びを表現する身振りが5歳児で多い点から、情動的共有が関係調整の発達の要因であることも示唆された。また、男児より女児の方が、相手への視線が多く相手への配慮が大きく、協力行動を早く発達させることが示唆された。

一方で、競争条件では、非言語コミュニケーションだけでは関係調整がうまくいかないこともみられた。特に男児では、協力に成功したとしても交代制ルールのない不平等な協力になっているケースもみられ、交代制ルールの意識に伴う関係調整の発達の未熟さが示された。

表1 年齢・性別・条件別のひもを引くルールの使用ペア数(%)

	4歳児				5歳児			
	平等条件		競争条件		平等条件		競争条件	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
交代制ルール	3(42.9)	3(75.0)	3(42.9)	1(25.0)	3(50.0)	7(87.5)	3(50.0)	3(37.5)
部分的交代	1(14.2)	1(25.0)	0	2(50.0)	0	1(12.5)	1(16.7)	3(37.5)
交代なし	2(28.6)	0	1(14.3)	0	3(50.0)	0	0	1(12.5)
同時制ルール	1(14.3)	0	3(42.9)	1(25.0)	0	0	2(33.3)	1(12.5)



(2) 小学生から中学生を対象とした交代制ルール意識の発達と遊びの好みとの関連

仲間との関係調整における交代制ルールの意識の発達を検討した。そのために、対象者の交代制ルールの意識に関する8項目の合計点を算出した。このデータに基づき、3学年(小学4年・小学6年・中学2年)×2性別(男児・女児)の2要因の分散分析を行った。その結果、有意差はみられなかった。各平均値は、小学4年生男児23.7、女児24.9、小学6年生男児23.9、女児23.9、中学2年生男児23.6、女児23.7だった。従って、仲間との関係調整における交代制ルールの意識は、学年差や性差がみられないことが示された。小学4年生からある程度の交代制ルールの意識を持っており、中学生までその意識が変化しないことが明らかになった。

次に、交代制ルールの意識とごっこ遊び・ルール遊び・一人遊びの好みとの関連を重回帰分析で検討した。その結果、交代制ルールの意識は、ルール遊びの好みと有意な相関があることが示された。ルール遊びを好む小中学生は交代制意識が高く、交代制ルールを足場かけとして仲間との平等な関係調整を行おうとしているのではないかと考えられる。仲間との関係調整の発達において、ルール遊び体験が重要であることが示唆された。

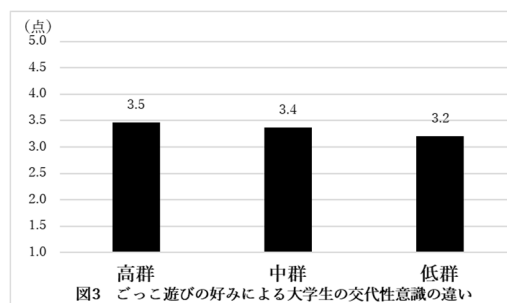
(3) 大学生を対象とした関係調整における交代制ルールの機能と意識

大学生の初対面の3人組でのゲーム場面の関係調整を分析した結果、発言の交代制ルールが明確なゲームの方が親密な関係性を促進することが示された。また、発言の交代制ルールが不明確なゲームでも、3人の笑いの量が多いことが関係性を促進すると示された。

大学生の2人組での協力場面の関係調整を分析した結果、協力課題のスピードが速かった対象者は、遅かった対象者よりも交代制意識が高い傾向にあることが示された。

大学生の交代制ルールの意識と子ども時代の遊びの好みの関連を検討した結果、図3に示すように、子ども時代に「ごっこ遊び」が好きだった人の方が交代制意識が高いという有意な傾向が示された。

以上の大学生を対象とした多角的な研究から、大学生の親密な関係促進や関係調整に交代制ルールの意識が機能していること、笑いという情動的反応が関係促進に影響していることが示された。また、交代制ルールの意識と子ども時代のごっこ遊びの好みに関連する傾向がみられたことから、子ども時代の遊び体験が交代制ルールの発達を促進する要因であることが示唆された。



(4) 総合考察

幼児期の協力場面での仲間との関係調整において、交代制ルールの使用と視線や身振り等の非言語的コミュニケーションが重要な役割を果たし、4歳から5歳にかけて発達し、男児よりも女児の方が、発達が早いことが示された。交代制ルールを足場かけとして関係調整を行うが、その際、喜びを表現する情動的な身振りの共有も重要であることが示された点が新たな知見である。大学生のゲーム場面の研究でも笑いの共有が関係促進に影響を及ぼしていることが示された。これらの結果から、交代制ルールという行動的側面と情動的側面の両面から仲間との関係調整を検討していくことの必要性が示唆される。

また、小学4年生から大学生まで対象年齢を広げ、交代制意識と遊びの嗜好性との関連が示された。小中学生では、交代制意識はルール遊びの嗜好性と関連していたが、大学生ではごっこ遊びの嗜好性と関連していた。遊びが現在進行形の小中学生と遊びを回顧する大学生とでは、交代制ルール意識との関連性が異なると考えられる。今後は、遊び経験の内容も含めて、交代制ルール意識との関連を検討していく必要がある。

以上の結果から、青年期の友人関係不適応を予防するため、幼児期から小学校低学年までの交代制ルールや遊びを体験できる保育・教育場面の設定の重要性が示唆される。仲間との関係調整の未熟な子どもの支援すべき側面は、交代制ルールの体験と相手に対する視線の向け方やアイコンタクトなどの非言語的コミュニケーションの促進、また喜びや笑いなどの情動共有の体験であることが見いだされた。

## 引用文献

- Asendorpf, J.B. & Denissen, J.J. & Aken, M.A.G. (2008). Inhibited and aggressive preschool children at 23 years of age: personality and social transitions into adulthood. *Developmental Psychology*, 44, 4, 997-1011.
- Dacey, J.S., Fiore, L.B., & Brion-Meisels, S. (2016). *Your Child's Social and Emotional Well-Being*. John Wiley & Sons, Ltd. Blackwell.
- 藤本学・大坊郁夫(2007). コミュニケーションスキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 3, 347-361.
- 藤田 文(2007). 魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動 - 交互交代の規準と主導者に着目して - 発達心理学研究, 18, 227-235.
- 藤田 文(2015). 遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：交代制ルールの産出とその主導者を中心に 風間書房
- 藤田 文(2018). 短期大学の多人数授業への協同授業の適用 - 個人の貢献度とコミュニケーションスキルの関連を中心に - 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 55, 53-62.
- 藤田 文(2019). 交代制ルールを中心とした子どもの仲間との関係調整の発達 科学研究費助成事業研究成果報告書
- 藤田 文(2020). 大学生の協同課題における交代制ルール 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 57, 85-96.
- Madsen, M.C. (1971). Developmental and Cross-Cultural Difference in the Cooperative and Competitive Behavior of Young Children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2, 365-371.
- Rubin, K.H. (1990). Introduction ; Special Topic: Peer relationships and social skills in childhood-An interactional perspective, *Human Development*, 33, 221-224.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 藤田 文	4. 巻 59
2. 論文標題 幼児の協同行動における交代制ルールと非言語コミュニケーション	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 97 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田 文	4. 巻 58
2. 論文標題 子どもの仲間関係に関する研究動向と展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 85 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田 文	4. 巻 60
2. 論文標題 大学生の交代性意識と子ども時代の夢と遊びの関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大分県立芸術文化短期大学	6. 最初と最後の頁 107 - 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 幼児の協同行動における交代制ルールと非言語コミュニケーション
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会（明星大学 オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 大学生の負債感特性と感謝特性の関連
3. 学会等名 九州心理学会会第82回大会（琉球大学 オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 大学生のゲーム場面における関係調整 発言の交代性と笑いの影響 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会 （筑波大学 オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 自立的しつけが大学生の話しかけスキルに及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会（東洋大学 オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 いざこざ場面における幼児の仲間との関係調整
3. 学会等名 九州心理学会会第81回大会（鹿児島大学 オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田 文
2. 発表標題 大学生の対人反応性と子ども時代の遊びの関連
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会（日本大学）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関